

なくなつてしまいました。それに、夫の治療代がかかるだけでなく、番頭に売上金を持ち逃げされ、財産もなくなつてしまいました。

岩子は、夫の看病と四人の子供を育てるため、思いきつて行商に出かけて働きました。

そのころのことです。こがらしの吹く冬のはじめ、いつものように、「反物たんものは、いらんかね。」

と、農家の戸口をまわっていた岩子が、ふと、後ろうしろをむくと、小屋の前のむしろを少し開け、ジーツとこちらを見ている子供がいるではありませんか。その目はへこみ、腹は少しふくらみ、手足はやせほそつていて、何かうったえるような、物ほしそうな顔をしています。

岩子は、ハツとしてその子のそばに走り寄り、言葉をかけました。

「どうしたの、おとうは、おかあは、」